
あと七日

ホチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あと七日

【Nコード】

N9685H

【作者名】

ホチ

【あらすじ】

十二月、大学の授業をサボりにサボった俺が部室に顔を出したのは一週間ぶりだった。そこには冷たいけど気になる後輩がいた。

「こんちわー」

十二月、大学の授業をサボりにサボった俺が部室に顔を出したの
は一週間ぶりだった。

「あ、先輩。久しぶりですね、何してたんですか？冬休みはまだ
先ですよ」

「なんか寒くて外出る気しなかった」

「酷すぎますね。その生活、親が知ったら泣きますよ」

「先輩に向かってズバズバと・・・・・・・・。ところで昼休みな
に森崎一人なの？」

「そうなんですよ。先輩みたいに寒くて大学サボるなんてはずな
いんですけどね」

心で小さくガッツポーズ。みんなナイス！

森崎麻美。一学年下の後輩。冷たいことばかり言い放つのは、た
ぶん、いや訂正する。絶対にこちらのせいだ。年中からかいすぎた。
その森崎がなぜだかわからないが夏頃から無性に気になる存在にな
った。答えを知っている本音の声には聞こえないふりを貫き通し冬
になった。

「そっか。森崎一人なのか」

「しばらくしたら誰か来ますよ。わたし一人ですみませんね」

「いや、嫌じゃないよ。ただ森崎と二人だと未だに何故か緊張し
ちゃうんだよね」

鼻で笑われた！

「いやいやいや。ちょっと森崎、鼻で笑うとかナシだから。今の
笑うところじゃない」

「だって。よくそんな思ってもないと言えますよね。先輩いつ
も適當すぎますよ」

「ちえ、本当なのにな。・・・・・・・・それより森崎今日も昼は手

作りなの？」

「一応わたしもオンナノコですから」

以前の森崎はいつも大学の購買部のおにぎりやパンだった。そのことで「森崎は料理が出来ない」とからかっていた。もちろん、まだ一年の森崎には必須科目が多く有り、料理どころではないほど忙しいのを知った上で、である。森崎とは同じ学部だ、レポートが山のように出されるということは去年の我が身が痛いほど知っている。それなのに森崎は「お弁当」を作るようになった。

「どうして近頃弁当作ってくるようになったの？」

「それはですね……どこかのうるさい先輩が料理できないでしつこいからです。黙られるには実際に作るのが一番効果的ですから。体にも良いし節約にもなるから別にいいんですけどね」

「ひどいことを言う奴もいたもんだ、けしからん。成敗せねばならんな」

「どの口がそんな台詞を吐くんですか……」
やれやれとため息をつく。

「ただこうして毎日作ると料理の腕もかなり上がりましたよ」

「たしかに森崎の弁当すつげえ美味しそうだな。それに比べて俺の昼なんてコンビ二のおにぎりだけだしな、しかもおかか。

目で楽しむなんて無理ありすぎ。ハア、僕は悲しいよ……」

「あげませんよ？」

「ガーン！そんな！先輩想いのかわいい後輩だと思ってたのに！」

「……嘘です。食べます？」

「いいの！？」

「いや、だつて先輩、あからさますぎますよ。どうぞ？」 森崎が差し出してくれた弁当はすでに半分ほどなくなっているが、バランスも良く、色合いも申し分ない。

「どれ食べていいの？」

「どれでもいいですよ。自信作は、自信作っていつでも適当に作

「つたんですけど、コレです」

「それではそちらをありがたくいただきますか」

口に入れじつくりと咀嚼。せつかく森崎がくれたんだ。よく味わわないと罰が当たる。

俺が飲み込むのを待ってから森崎が訊く。料理を作った人なら誰もが一度は必ず訊くこの台詞。

「どうですか？美味しいですか？」

「うまい！！美味しいよ。森崎おまえ天才。ゴメン、正直見くびってた」

「先輩大げさですよ」

「いやいや、ホントに美味しい。味もよく染み込んでるし。朝の時間ない時によくここまで作れたね。少なくとも俺には無理だ」

「褒めすぎですよ。だけど美味しいって言ってもらえて嬉しいですよ。……もう一個食べます？」

「いいの？それじゃあ今度はコレ貰うよ。……………」

・うまい！コレもうまい！」

「それは昨日の夕飯の残りです。さすがに朝に何品もおかずは作れませんからね」

「俺も一人暮らしだから誰かの手料理食べるなんて本当に久しぶりだ。久しぶりすぎて涙出そう」

「そこまで喜ばれると作った甲斐があるってものですね」

「……………麻美。俺に朝の味噌汁を作ってくれないか？」

「先輩、それはキモいです。やめてください」

「すみません。調子乗りました。だけど弁当はホントにありがとう。今度は俺がお礼に作ってくるよ」

「まったく期待しないで待ってます」

森崎の弁当から離れるとコンビニのおにぎり君が左手にいる。現実に戻された。人の温かみを味わった後だけに、余計冷たく感じる（温めていないから本当につめたいのだが）。

「先輩。しょんぼりしすぎですよ」

「だって、森崎の手料理の後に機械が作ったおにぎりだよ。テンション下がらないのは嘘でしょ。おかず味わってないで一緒にかき込んでけばよかった」

「そう言わないで。コンビニだって美味しいですよ。それが嫌なら自分で作るとか」

「弁当男子ってやつですか……」

「それもいいよ、たしかにいいけどー」

「誰かに作って貰うのが一番嬉しいよな、やっぱ」

「だから作りませんってば。……おかずが余ったら今日みたいに少しあげてもいいですけど」

「マジ!？」

「あくまでも余ったからです。期待しないでください。そしてその希望を絶やさないためにもちよつと黙っててください。話してばかりでごはんが食べれません」

「……………」

部室の読み飽きた漫画をペラペラとめくりながら最後の一口を頬張る。

「……………」

森崎家での食事は騒がない方針だったらしい。というか森崎は普段も自分からはあまり話さない。いつも相手の話を聞く側だ。森崎自身のことは話さない。だから森崎のことは実を言うとあまり知らない。——気になってしょうがないという心の叫びには蓋をしている。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ぶはっ！駄目だ。喋ってないと死ぬ」

「早っ。ってまだ三分も経ってないじゃですか」

「沈黙って苦手だ」

「家にいるときどうしてるんですか。もついいですよ。ごはんもほぼ終わりましたし」

「……………」

「喋らないんですか？」

昼休みはもうあまり残っていない。二人きりの今、チャンスを逃す手はない。っていうか行け！

「……………来週だよな」

「何がですか？」

「いや何がつて。来週から冬休みだよ。森崎って予定とか立ててるの？デートとか」

遠回しに付き合っているかの確認。茶化しながらじゃないと訊けっこない。

「先輩に彼氏のことなんて仮にいても言いませんよ。すぐに広まりそうだし。ただ残念ながら恋愛イベントはなさそうです、バイト漬けですよ」

よっしゃ。ーチクリと痛むのは森崎からの信頼がつくづくないということ。少しずつでもいいから修復していかなくては。だがどうやって。

「それがどうかしたんですか？」

「暇なら何かしたいなあって思ってたさ」

「いいですね。みんなで部室でクリスマスパーティーでもしましょうか」

違っよ森崎、

「二人がいいな」

壊れるかもしれない関係に怯えて腹を括るのに一週間かった。

「え？……………またまたあ、適当なこと言ってからかわないでください」

今なら冗談ですませるというラインを森崎は引いてくれた。この

ラインを越えたらー

「真剣なんだけど」

戻れない。

「……………マジなんですね？」

「マジ」

「そうですか……………だけど先輩、こういう大切なことって昼の食後にすることじゃないですよね」

ムードも何もあったもんじゃない。照れているのか拗ねているのか、それとも怒っているのか。声色では森崎を読めない。

「なかなか二人きりになれる機会ってないんだよ。そこは森崎もわかってよ」

「それじゃあそこは目をつぶります……………冬休み初日は何も入ってないです」

「で、何するんですか？」

「悪い、誘うことだけで頭一杯で後のこと考えてなかった」

「何ですかそれ」

「断られるとばかり思ってたから。自分でもかなり分の悪い賭だと思ってた。森崎にはつまないことばかり言ってたし、リアクシヨンもいつも薄いしさ」

「わたしそんなに冷たくしてましたか？本 当に嫌だったら先輩の話にこんなにくさん付き合ったりしませんよ」

むしろ楽しかったです、わかってると思っていました。

「そうだったのか。言わなきゃ！森崎そこは言わなきゃ！」

「先輩が調子乗るの目に見えてましたから」

「う……………否定できない」

「先輩っておだてられたらどこまでも昇って行きそうですもんね」

「俺は褒められて伸びるタイプなんだよ」

「知らない知識です。とにかく何をするかは考えておいてくださ

いね。そろそろ次の授業始まりますよ」

結局昼休みは他には誰も部室に來なかつた。扉窓から中の様子を見て氣を利かせてくれた？まさかね。願いでも通じたか。

俺も森崎も午後一番の授業があつた。部室の戸締まりは先輩がする、これが我が部のルールだ。

鍵を閉めていると、

「楽しみですね」

とつさに振り返るが森崎はすでに廊下を歩きだしている。背中が心なしに嬉しそうなのは鼻屑目だろうか。

ずるいよ、不意打ちだし、なんだよその声！反則だ。――めちゃくちゃ嬉しくなっちゃうだろ！

急いで後を追うと森崎はクスクス笑っていた。

「先輩つて、簡単な性格ですね」

だけど楽しみにしてるのは本当です。別れ際の一言にも俺は舞い上がってしまった。・・・・・・簡単な性格でした。

授業中にメールが届いた。

「一応参考までに訊きますけど、先輩の好きなおかずって何ですか？」

教授の子守歌から一発で覚醒した。これでもかと列挙して返信。数分後に返信が來た。

「その数は不可能です、自重してください」

やりすぎたかと反省して送り返そうとすると氣が付いた。下にまだある。

画面を下にスクロールしていくとやはりあつた。

「一度には無理なので、回数分けますね」

だから反則だよ。

席を後ろに選んでいて良かった。今の顔は見せられるものじゃない。

森崎と何をしようか考えを巡らせる。期待に満ちた冬休みまであと七日しか残っていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9685h/>

あと七日

2010年12月21日20時05分発行